［読む館長講座⑥］

東北歴史博物館館長講座概要　　2022 年 9 月 24 日

「東北グローバル考古学 part2―原始・古代のロマンと科学―」⑥

現代人的行動の起源

阿子島　香

はじめに

館長講座の 6 回目は、私たち「現代人」とは、いったい何者であるのか、という大きな問題への一つの手掛かりに、太古の歴史を辿ってみたいと思います。まず「現代」という言葉ですが、日常では「現代っ子」とか「現代風」のように、最近の社会的な変化を思い、昔と比較して今はなんと・・・という脈絡で考えることが多いでしょうか。

さて、館長の世代は学校（1970 年代前半）で、現代はいつからかという時代の区分について、日本史では 1945 年以降を現代史、世界史では 1917 年以降を現代史、と教わった記憶があります。（もちろん皆さん、それぞれの世代や、教師の歴史観によっても、様々と思いますので、一例とお考えください）。第二次世界大戦の終結と、第一次世界大戦の終結前年になりますが、当時高校で教えられたのは、日本が民主主義社会に変革した年、世界が社会主義国家の誕生（ロシア十月革命）により、二つの陣営に分かれた年という脈絡だったと覚えています。いずれの見方も、歴史認識によって、社会の大きな仕組みが今と同じになった時からが現代、という考え方です。今から見て、世界史の枠組みが基本的に同じところで線引きをするというのが、時代区分の「現代史」という考え方です。それでは、考古学的人類史から見た場合、「現代人」とはなんだろうか、今回講座で考えてみたいと思います。

考古学的人類史から見る「現代」

数百万年の人類史を視野に入れて、この言葉「現代」を捉えれば、世界の考古学・人類学界で通用している意味、すなわちホモ・サピエンスの時代を現代と考えて、「現代人的行動」を、「解剖学的現代人」と合わせて考察していくという大きな研究分野があります。もう半世紀以上にわたって、この課題について各国の研究者が追究してきました。英語ですと、Modern Human Behavior, Anatomically Fully Modern Man というテーマになります。今回講座の副題「近現代史・考古学・人類学」に、英語でこの「現代人的行動」Modern Human Behavior と添えましたのも、私たちにとって「今」とは何であるのかを、国際文化的にもニュートラルな意味で考えてみようという意味を込めています。

特にヨーロッパでは、旧人類（ネアンデルタール人）と、新人類（クロマニョン人）の入

れ替わり（交替劇と称されます）が顕著ですので、遺跡や石器文化、復元できる人間行動に、大きな断絶があって、石器を作る原人に進化してからでも少なくとも 200 万年の年月の長さと、3 万数千年前よりあとという年月との対照が非常に大きいことから、新人はすべて「現代」という位置づけが通説になっています。

石器スタイルの変化

旧人類が残したムスチエ文化の石器と、新人類になってからの諸文化の石器とを比較すると、本質的な相違が認められます。ムスチエ文化では、約 10 万年間の長きにわたり、あまり型式学的な変化はなく、いろいろな遺跡の文化層を比較しても、石器の組み合わせは、古から新へ、あるいは製作法の精緻化といった「定向的進化」ではなくて、モザイク状に出現しています。フランスのボルドは、ムスチエ文化の石器を 62 もの石器型式に分類しました。もっと古くから作られていたハンドアクスなどの両面加工石器と共に、組成と技術を分析した研究で、このような不思議な状況が明らかになりました。

ビンフォードが指摘したように、ネアンデルタール人が各遺跡の文化層で行なっていた人間行動の違いに起因する可能性は大きいと考えられます（諸説あります）。石器の型式の広がりも、全ヨーロッパ的といえるような広範囲の同様な分布を示します。ムスチエ文化の分布範囲内で類似し、技術的な特徴である広義のルヴァロワ技法も、遠くシベリア南部、アルタイ地方まで広がっています。

後期旧石器時代を迎えますと、状況は一変します。初期後期旧石器（IUP）としてまとめられる過渡的な時期の数千年間を経て、その後の石器文化は、年代的、地域的な多様性が目立つようになります。石器を編年すれば、スタイルの変化はめまぐるしく、地域の特徴は細かく分かれ、人々のまとまりを示す「集団表象」という意味も読み取れるようになります。多くの文化名が名付けられて、各国でそのような「石器文化」の記述と編年研究が行なわれてきました。

日本列島の後期旧石器時代の「ナイフ形石器」の地域性については、古くから研究されてきましたが、人類文化の地域的差異の「現代的出現」という、同様な脈絡で捉えられるものです。「杉久保型ナイフ」「茂呂型ナイフ」「国府型ナイフ」が代表的です。石器に年代的な変化がはっきりするようになりますので、型式学による石器の細分と、年代による枠組みとが整合して、かなりの詳細編年ができるようになりました。石器が、時間と空間の、ある程度の指標になり得るということで、このことが逆に「現代人」が有する文化の特性をあらわしていると考えられます。集団の内部で斉一的、一方広域でみると変化が大きく、時間の中で細分化（いわば流行、はやりすたり）があり、同時期と前後の時期で大きく変わる、という姿です。のちほど説明します現代人の「象徴性」「集団性」「共同性」の反映でもあります。

自由意思と法則的合理性

もっとも、石器は剥離に適した原石を加撃して、割って作っていくものですので、ヒトの

手で自由に制作していく土器に比べますと、石材や製作法の限定が大きいといえます。そのため、編年の指標として用いるのには、土器に比較すれば限界があるということも、認識しておかなければなりません。「似た石器」だからといって、「同じ年代に属して」「同じ人間集団の産物」というわけでもないのです。「年代・地域」と「材質・技術・機能」の両者によるバランスの実際は、経験的に理解しなければなりません。考古学を専攻する学生諸君は、これまでに積み上げられてきた編年研究の成果を、実際の資料を手に取りながら経験することで、土器や石器の編年的指標としての可能性と限定とを、実習的に学んでいくのです。

この学びは、過去における「現代人的行動」の結果を、今に追体験している行為と言うこともできるでしょうか。土器と石器はこんなに違う、そして「現代人の意思」を反映する物体の「可塑性」と、「現代人の合理性」を反映する製作技術の「法則性」を学ぶことになります。自由意思と合理的思考とは、共に現代人の有する属性です。たとえば原人たちが、どこまで両者を保有していたのか考えますと、その差には歴然たるものがあります。ハンドアクスの編年と、オーリニャック文化からマドレーヌ文化への編年の緻密さの程度の差異、また両者の石器文化での、器種細分化の度合いの飛躍的展開を見ても、この領域での人類文化進化を見ることができるでしょう。

石器製作の工程と連鎖

後期旧石器時代になりますと、新人の石器製作法は旧人の比ではない複雑な工程を持つようになります。工作の順序と段階、すなわち製作から使用への計画の時間的な長さを反映するようになります。時間の長さが思考の中にどれだけ組み込まれているか、という基準も、「現代人的行動」の指標になるものです。プロセス考古学の用語では、「計画性の深さ」（planning depth）という基準になります。

典型的な事例として、工程連鎖という数段階を要する石器製作法に、細石刃文化があげられます。東北大学で調査しました遺跡には、新潟県荒屋遺跡、山形県角二山遺跡があります。東日本の細石刃文化では、「湧別技法」という石器製作システムがあり、国際的にも有名です。まず楕円形に近い両面加工の素材形を作り、長い軸の方向に断面が三角形、次いでスキーのような形の長い石片を剝がし取ります。そのようにしてできた平らな面に、上から絶妙な力のコントロールで圧力をかけて、素材の端の方から順序良く、次々に、小さなカミソリの刃のような鋭い細石刃を多数、量産していきます。細石刃は、そのままでは小さくて使用困難ですので、骨角や木の軸に溝を彫って、嵌め込んで固定し、武器（狩猟・漁労具）とします。

後期旧石器時代の多くの石器は、石刃石器群のように、素材から完成品までの段階を持った製作法で作られました。石刃を材料にして、彫刻刀にしたり、エンドスクレイパー（掻器）にしたり、ナイフにしたり、種類の細分化と使用法、原料から完成品までの過程が、非常に複雑になっているのです。（令和３年度館長講座概要　**第６回「石器製作のハイテク」**参照）。原人や旧人の石器製作法からは、質的な転換がありました。数十万年の間に、だんだんと高

度に進化していったのではありませんでした。

道具と行動の複合化

「現代人の道具」は、複雑な組み合わせを伴って製作されるようになります。弓矢を考えると分かりやすいですが、弓は弦と一体で、弓には弦を付ける仕組み（弓筈、ゆはず）が伴います。矢は、矢尻と矢柄と矢羽根で構成されて、短い矢軸を中継ぎにすることも多い仕組みです。人間の、一連の確かな所作で、初めて弓矢は機能します。余談ですが今年、消防庁他の防災運動のポスターに、弓道選手が弓矢を引き絞る写真と共に「一連の確かな所作で無災害」という標語があって、私にはこれが「現代人的行動」の本質を示すように見えました（考古人類学者的認識？）。おそらくネアンデルタール人には、このような所作はできなかったと考えられます。道具の複雑な構成は、それを使用する複雑な行動の順序立った連鎖を、前提として成立するものです。さらに弓矢を考えれば、古代における馬の飼養、騎馬の習俗と技術、高度な行動複合である騎射（騎馬民族の戦闘など）と、行動連鎖は何層にも重層化していきます。このスライドの流鏑馬（やぶさめ）の光景は、まさに道具の複雑な構成と、「現代人的行動」の重層化した動作が、技術複合として高度な水準になっている状況を示すものでしょう。

言語と行動の構造的類似

このような重層的な複合性は、人間の言語が持っている構造と文法にしばしば例えられます。よく出されるパターンですが「ユニークな博物館の企画展を見に行く」は、博物館がユニークなのか、企画展がユニークなのか、単語と単語のつながり具合で、文の意味するところが変化します。単語（音声）と、物体や事象との対応は、それぞれの言語ごとに独自です。「ハナ」は、花だったり（日本語）、一つだったり（韓国語）、自在な組み合わせが言語ごとにあり、文法で構造化されて、意思を伝えます。

意思を伝える役割と同時に、人類は言葉で思考を行ないます。ものごとを考えるのに、言語がなければ思考することさえも不可能です。概念と文法で、複雑な思考を行なうことができるようになりました。先に説明した石器製作の複雑さも、言語の発達なくしては、不可能だったと考えられます。

すなわち、すべての「現代人的行動」の基盤にあったのが、「言語」の飛躍的な発達と運用能力でした。今でも一般に、思考は、言語を通して実体化するという原則は変わりません。今でも、異文化を理解するには、まず言語の習得と使用が第一であるということを考えれば分かりやすいでしょうか。言葉が違えば、周囲の世界を捉える認識も異なってきます。極北の寒冷地に暮らすカナダの「イヌイット」（アメリカでは「エスキモー」ですが同じ民族です）の人々は、雪と氷に関する非常に多くの語彙を発達させていることはよく知られています。後期旧石器人たちは、おそらく石器の材質や加工の方法については、非常に豊富な言葉を発達させていたに違いありませんが、私たち現代の考古学者には、残念ながら言葉を復元

することはできません。しかし、石器の製作例の行動連鎖の分析から、何が意識されていたのかを、ある程度、考えていくことは可能です。

生業活動の計画性と行動の組織化

生活の基盤である生業活動では、季節的な計画性が表れて、その後の時代に継続、発展していきます。新人の遺跡と旧人の遺跡を比較すると、集団の行動が構造的になったことが堆積層の内容に反映されてきます。スライドはフランス南西部ペリゴール地方のレ・ゼジーにあるロージェリー・オート東岩陰の堆積層の断面図です。後期旧石器時代のクロマニョン人が残した堆積層で、文化編年の基準遺跡になっています。フランソワ・ボルドが 1957 - 58 年に発掘調査した遺跡です。

ボルドは近くのコンブ・グルナル洞窟遺跡、ペッシュ・ド・ラゼ洞窟遺跡も発掘しており、こちらには中期旧石器時代（ネアンデルタール人）の堆積層があります。一見、堆積層の状態は同じように見えて、累々と文化層が重なって見えます。しかし、多くの後期旧石器時代の遺跡構造を分析すると、中期の遺跡は同じような内容がランダムに重層している場合が多いのに対して、後期の遺跡は部分ごとに異なる内容が残されており、行動の計画的な組織化が反映されていることが理解されます。

ボルドは、『二つの洞窟の物語（A Tale of Two Caves, 1972）』という名著を世に送り、ムスチエ文化の洞窟遺跡の実際を論じました。石器型式、層位学、気候変動などに重点が置かれていました。同じ頃にビンフォードは、コンブ・グルナル遺跡の出土石器、動物骨、発掘記録を、ボルドー大学まで赴いて、詳細に分析をしました。その結果、ムスチエ文化論争として知られることになる学説対立に至ったという研究史があります。後期旧石器時代の遺跡によく認められる遺跡構造の分化と、個別の活動が復元可能な遺物の分布、組織化された行動の反映といった状況は認められず、中期から後期への大きな変革を示すことになったと、研究史を評価することができます。一例を紹介しましたが「後期旧石器の革命」は多くの面から論じられてきました。私が参加したフランス南西部の遺跡であるドゥフォール岩陰でも、クロマニョン人たちが行なっていた、人間行動の組織化が、遺跡構造内部に、明確に認識されました。（令和 3 年度館長講座概要　**第 4 回「氷河時代のハンターたち」**参照）。

思考における象徴性

おそらく最も重要な「現代人」の特徴は、「思考における象徴性の獲得」ということでしょう。集団の構成員が共通のシンボルの体系を共有して、それらを用いて集団の人々の行動を結束させていきました。クロマニョン人の残した世界最初の芸術と言われる洞窟壁画の数々も、このような象徴的な世界認識の表現でした。（令和 3 年度館長講座概要　**第 5 回「美術と思想の起源」**参照）。

神話や宗教観念は、共通の思考内容となることで、集団の構成員の結束を強め、思考と行動に自信をもたらしました。別の世界（異界）は、世界を説明する原理として普遍的に共有

され、異界との往来や、通信という観念が持たれました。これらすべての象徴的な思考は行動の原理となって、たとえ外部からみたら「虚構」であったとしても、人間集団の生存の力を拡大したと考えられています。「虚構もみんなで信じることができる」のも、現代人の特質と言えるでしょうか。今の世界までに至る「通貨」の本質を考えると、分かりやすいかもしれません。

共同行動で生存を維持

周囲の環境への対応、あるいは別の集団との関係において、仲間が共通の観念でまとまるという行動を、強力な生存維持の仕組みにしました。ことばを換えてみると、「現代人は、みんなで共に生きていく」という存在になったのでした。

コミュニケーションとは、現代人にとっての本質的な能力でありました。仲間の集団の中では、意思の疎通は、生存に関わる大事でした。遠方の美しい貝殻が内陸部の遺跡で出土するような、広域的な集団間のネットワークが確立したのも、ホモ・サピエンスの世界になってからのことです。ネットワークの強化は、環境の変動への抵抗力を強めました。別の集団との協力関係により、全体としての適応力が飛躍的に増大したと考えられています。この意味では、最近よく言われる「孤独な現代人」は、そもそもあり得ない存在でした。

「現代人的行動」の準備期間

アフリカにおいて、人類がホモ・サピエンスに進化して、さまざまな現代人的行動が発現するようになった過程は、長い時間を要した道のりだったようです。研究は現在も進行形で続いていますので、以下は概略の通説です。最古の新人は、20 万年～10 数万年前にアフリカ南部に出現しました。美術的表現としては、10 万年～7 万 5 千年前に、平行線が何本も交差する模様が刻まれた酸化鉄石片が、南アフリカのブロンボス洞窟で発見されています。約 7 万年前には、南アフリカのピナクルポイント遺跡で、投射武器の先端部と考えられる細石器が出土しています。柄に装着して使用したとされます。組み合わせ道具の起源といえるでしょう。

ヨーロッパに新人が到来する頃には、かなり発達した現代人的行動が確認されますから、それまでの 10 数万年～数万年間の時間は、約 5 万年前の「出アフリカ」までの、漸進的な現代人的行動の発達期間と位置付けることができるかもしれません。長い時間を経て、アフリカ内で身体プラス文化の進化が完成し、一気にユーラシアへの拡散が起きたと考えてもよいかもしれません（諸説あります）。中東では、8～9 万年位前に、新人が発見されていますので、先駆的な移動も起きていたのでしょう。現代人的行動については、なお新たな発見で学説は変わっていく余地が大きいと言えます。

いずれにしても、約 4 万 3 千年前にはフルート楽器とされる骨器が、ドイツのギーセンクレステルレ洞窟で発見され、最古のクロマニョン人の洞窟壁画は、4 万 1000 年～3 万 7 千年前に、スペインのエル・カスティーヨ洞窟で制作されたとされます。最古のヴィーナス

像は、4 万年～3 万 5 千年前に、ドイツのホールフェルス遺跡で出現しています。マンモスの象牙に石器で彫刻した、顔のない豊満な女性像です。ヨーロッパでは、新人と旧人の「交替劇」が起きたので、両人類の文化差がいっそう際立つということでもあります。

新人類がアフリカを出てくるまでに、数万年間以上の準備期間的な時間があったとすれば、その間にヨーロッパで独自の進化を続けていたネアンデルタール人が、それなりに現代人的行動の萌芽が認められることも、理解されます。ポルトガル人の研究者ジリャオ氏（館長はアメリカで一度だけお会いしたことがあります）は、ジブラルタル海峡周辺のネアンデルタール人を研究していますが、ヨーロッパの旧人の萌芽的な現代人的行動について指摘しています。顔料を広く使用しました。一部で装身具（ホタテ貝彩色ペンダント）、細石器、骨製の道具、石刃、海産資源利用、鳥類の狩猟などの存在を指摘します。しかし美術、死者の埋葬、長距離交易は不明としています。

「韓国先史文化研究院」との共同研究

講座では、韓国の後期旧石器時代の初頭、約 4 万年前の、組み合わせ型の石器を事例にして、現代人的行動の一面を説明してみます。「スンベチルゲ」という、茎（なかご）を有する刺突具（有茎尖頭器　Tanged point）が、新人の渡来と共に、韓半島で初めて出現する時期の文化層です。韓国忠清北道にあるスヤンゲ遺跡の出土石器を分析する機会があり、清州市にある「韓国先史文化研究院」との共同研究として、石器の使用痕分析を実施することができました。前回の館長講座で解説しました方法によります。（読む館長講座⑤　**「石器の使い方を科学する」**参照）。東北地方の旧石器研究との関連という枠組みで、共同研究の成果は当館の出版物で公表いたしました。

この論文は、当館の社会的使命を鑑み、また国際的な共同研究成果は共通言語で表現されるべきとの歴史認識から、英語で記述しましたが、日本語による詳しい解説も掲載してありますので、どうぞご活用ください。当館ＨＰから、どなたもダウンロードできます。4 名の共著になります。阿子島香・洪惠媛・禹鍾允・李隆助「付編　韓国スヤンゲ遺跡スンベチルゲの機能と後期旧石器時代前半期」**『東北歴史博物館研究紀要』23（2022）**所収。当館 HP の他に、奈良文化財研究所による「全国遺跡報告総覧」にも、ＰＤＦが公開されております。

スライドで、使用痕分析の顕微鏡写真を含めて、共同研究成果を紹介します。またスヤンゲ遺跡の発掘調査についても、概要を紹介します。

石器に現れる現代人的行動

「現代人的石器」の特徴としてあげられることに、複雑な工程を経て製作されるという点があります。石器製作技術の中に、人間行動の計画性という時間的な長さが「埋め込まれて」いるのです。現代人とは、今を生きるだけではなくて、未来を予測して行動する、将来を計画する、また過去の記憶を繋げて将来を見通す、という存在です。動物とは違って、「今」というのは長い時間の流れの一点なのです。石器製作に工程があるばかりでなく、原材料

（石器に最適の石材の獲得）から、使用（どんな作業が予想されるかを、時間的な流れで把握）、廃棄（消耗、再加工、入れ替え）に至るまで、一連の確かな所作の流れがあって、初めて新人の石器は機能します。弓矢が使用されるようになる以前でも、このような本質は共通しています。石器製作をめぐる構造は、新人になって「技術組織」として確立しました。

今回の共同研究では、新人が渡来して間もない遺跡である、スヤンゲ遺跡の最下層の文化に、このような組織が実在することを明らかにできました。韓国先史文化研究院の高精度の発掘調査と、私たちの使用痕分析の方法が連携して、東アジア最古のホモ・サピエンス的石器製作の一面を、垣間見ることができました。

「スンベチルゲ」という石器

基部が加工されて舌状部を形成する「スンベチルゲ」は、韓国語で茎（なかご）を有する突き刺す道具、「有茎刺突具」といった名前です。この器種は、韓国の後期旧石器時代を通じて出土する、代表的な石器の種類です。英語での名前は tanged point ですが、日本考古学での tanged point は、後期旧石器時代終末頃に多くある「有舌尖頭器」を指すことが多いので注意が必要かもしれません。スンベチルゲは、日本考古学では「剥片尖頭器」という石器器種名が与えられてきました。特に九州の後期旧石器時代での出土事例が多くあり、韓半島と比較されてきた研究史があります。

一方で、日本考古学で「ナイフ形石器」という器種名で一括して呼ばれている石器の中にも、技術形態学的にスンベチルゲとして分類しても差し支えないような石器も含まれています。東北地方では、石刃石器群の中のナイフ形石器に、韓半島のスンベチルゲと類似する出土事例もあり、比較研究が進められてきました。韓国南部の光州市は、仙台市と姉妹都市で、今年は姉妹都市２０周年の記念行事などもありました。光州市にある朝鮮大学校の李起吉教授は、東北大学総合学術博物館客員教授として滞在され、共同研究を行なって、東北地方のスンベチルゲの存在を指摘されました。東北大学の「最上川プロジェクト」の遺跡では、新庄市上ミ野 A 遺跡、舟形町高倉山遺跡で出土しています（李 2014）。

忠清北道スヤンゲ遺跡

スヤンゲ遺跡は、韓国中部、忠清北道丹陽郡の南漢江上流にあります。1980 年代から、李隆助・教授を中心として、継続的な発掘調査が実施されてきました。韓国を代表する後期旧石器時代遺跡として有名です。ダム工事などの水利事業で、川に沿って第 I 地区から、第Ⅵ地区までの調査区があり、現地には遺跡博物館もあります。遺跡がある丹陽（タンニャン）の町は、観光地にもなっています。1983 年の第 1 次調査から、2015 年の第 13 次調査まで、忠北大学校博物館、韓国先史文化研究院によって発掘されました。今回の分析は、2013 年～2015 年の第 11 次～第 13 次調査によって出土したスンベチルゲを対象としました。第 I 地区出土の 13 点、第Ⅵ地区第 3・第 4 文化層出土の 83 点、計 96 点です。

使用痕分析では、石器の石材、製作技術、型式と組成、出土層位と空間分布などの背景情

報を十分に考慮したうえで、最適な具体的分析手法を選択していくことが重要です。まず各種方法を試行し、スヤンゲ遺跡の石材の種類、石器表面の状態などを観察検討しました。分析方法として、高倍率法と低倍率法を併用する手法が最適と判断されました。対象資料のうち、47 点は使用痕分析に有望と判断され、詳細な観察を行ないました。スヤンゲ遺跡の石材は多くが「頁岩」(shale) と分類されており、日本東北地方の頁岩と類似します。しかし、現状の表面が灰色や灰褐色のような明色、また縞模様を有する石材では、高倍率下での微小光沢面があまり検出できないことが判明しました。やや専門的になりますが、使用痕分析の実際をご説明できればと考えました。

使用痕分析の結果

スヤンゲ遺跡では、微小剥離痕に着目する低倍率法が有効性を発揮して、多くの情報が得られました。公式の発掘調査報告書に寄稿できました（阿子島・洪　2018)。その結果から要点をご紹介します。

１）機能の解釈とは、観察事実と参照基準資料とによる、推論です。石器が使用されたか非使用か、不明か。石器のどの部分が使用部位か。どのような動作に使用されたか、刃部に並行方向、直交方向、混在、不明。どのような加工対象物に使用されたか、軟らかい、中程度、硬い、あるいは特定の加工対象物の大別（骨角、木材のように)。

２）96 点のスンベチルゲのうち、分析した資料 47 点の多数から、何らかの使用に関する情報が得られました。石材の多様な種類や、表面の風化状況にもかかわらず、成果が得られた理由として、低倍率法と高倍率法とを併用したという方策がありました。しかし埋没後の表面変化(PDSM) のために、微小光沢の検出例が限られて、加工対象物の特定は限定的成果にとどまりました。比較的に暗色の材質で表面変化が少ない石器に、微小光沢の残存が確認されました。

３）スンベチルゲの使用方法は、多様性を示します。それは、必ずしも投射具としての槍先というわけではありません。多くの種類の作業に用いられました。切断、鋸引き（双方向切断)、掻き取り、削り、などです。

４）多数の事例では、尖頭器先端部には投射具としての形跡は確認されませんでした。むしろ、石器の側辺部が、作用刃部として機能した証拠が多く認められました。右側辺と左側辺の両方が使用されていました。両側辺が使用されている場合、鋭利な縁辺（型式学的には刃部とされる）も、刃潰し加工や鋸歯縁加工が認められる対側辺も、その両方が使用されている事例もありました。特に、鋸歯縁加工（デンティキュレイト）がある側辺部分には、刃部に直交方向の使用痕跡が認められることがありました。鋭利な縁辺は、平行方向にも、直交方向にも使用されていました。

５）スンベチルゲの基部には、明確なパターンが認められました。基部を形成する凹んだ部分に、摩滅が多く認められました。とくに、調整加工による凹み部分のオーバーハング（リタッチの打面側の縁）上に、顕著な摩滅がある事例が多く検出されました。その摩滅は、何

らかの「着柄行動」に起因するものと判断されました。すなわち、スンベチルゲは、柄に装着されていた石器だったと実証されたのです。

現代人的行動の起源理解へ

スヤンゲ遺跡では、未解決の課題も残されていましたので、2019 年 9 月に新たな共同研究プログラムを進めました。スンベチルゲの基部の抉り部分を中心に、中倍率法という新手法で再観察を行ないました。デジタル顕微鏡を使用して、約 100 倍で 13 点を分析しました。その成果は、『東北歴史博物館紀要』23（2022）で公表したところです。実は、さらに継続して分析を進める段取りが整っていたのでしたが、ちょうどコロナ禍が始まって、共同研究プログラムは継続中止とせざるを得ませんでした。残念です。

中倍率法は、かつてロシアのセミョノフが重点的に行なっていた方法だったのですが、近年はあまり注目されなくなっていました。今回の目的である着柄行動に伴う形跡の検出に適すると考えて、この手法を復活させて、成果がありました。やはり、スンベチルゲの基部は、ほぼ例外なく着柄されていたようです。そして、利器として使用されていない資料であっても、着柄は行なわれていたことが判明しました。「現代人的行動」という視点で考察しますと、東アジアに渡来した初期の新人の石器において、「時間的な計画性」「工程の連鎖」が実証されたと考えております。詳しくは、当館紀要 23 をご覧くだされば幸いです。

スヤンゲ遺跡の第 4 文化層は、最下層の石器群であり、第 4 文化層の暦年較正年代は、41874-41254 calBP となっています（95%での数値）。

おわりに

私たち人類が「現代人」となってからの行動の特色を、さまざまな面で考えてみました。人類が辿ってきた長い道のりを考えるとき、数万年前からの「人類史的現代」は、それまでの 700 万年、400 万年、200 万年といった各段階の時間の長さに比べれば、なるほど現代であるという考え方が、不思議ではないことが知られます。そして、多くの人類たちは、絶滅の運命に至りました。現在の世界に生きているすべての人類は、同一の、そして唯一の種である現生人類、すなわちホモ・サピエンスであるという事実が、私たちに突きつける歴史の重みを、あらためて考えていくべきであろうと思います。

本日も、ご清聴いただきありがとうございました。（最後までお読みいただき、ありがとうございました。）。

（本稿は、当日スライドも踏まえ、講演内容に補足して加筆し、再構成したものです。会場では、スライド画像で多くの具体的な例を紹介しながら説明しました。「読む館長講座」では、やや哲学思想的な表現になっています。なお参考文献は、日本語の入手・閲覧しやすいものを選択しています。）

参考文献

阿子島香（2019）「ラスコーを生み出した日常生活」東北大学文学研究科人文社会科学講演シリーズ 11『未来への遺産』所収。東北大学出版会。

阿子島香・洪惠媛・禹鍾允・李隆助（2022）「付編：韓国スヤンゲ遺跡スンベチルゲの機能と後期旧石器時代前半期」『東北歴史博物館研究紀要』23、13－20 頁。

東北歴史博物館特別展図録（2017）『世界遺産ラスコー展』海部陽介展示監修、国立科学博物館他編集。